

結び前の一番では、千代鈴が美空富士に勝って8勝目をあげた。新大関の場所での優勝争いを演じて8勝に合格点でしよ！と優勝はならなかったが春日根親方もまずまずといった表情だった。

そして、いよいよ注目目の結びの一番。東から春ノ翔、西から大神楽が上がる。これまでの対戦成績は春ノ翔の11勝7敗。桐壺と磯ノ海の連合稽古で若い頃から互いに稽古してきた間柄。しかし、新しい締め込みでの対戦は初めてかもしれない。

桐壺親方、磯ノ海親方も近くで見守る中、行司軍配が返ると先に左を差して十分な体勢になったのは大神楽。春ノ翔としては絶体絶命の体勢となったが、土俵を回って必死に堪える。逆転のチャンスがうかがう春ノ翔だったが、最後は力尽き大神楽に寄り切られた。

コロナ禍の中、大声を出したら退場と言われていたが、そんなことは構いなしに「ヨッシー！やっしー！」と大声を発して喜びを全身で表わす磯ノ海親方。参加の親方からは次々に「おめでとう！」のゲータツチでの祝福を受けた。その後、表彰式が行われ、大神楽に朝日松理事長から2回目の賜杯が授与された。



千代鈴〇(寄り切り) ●美空富



白熱の緊急理事会の様子

で大関昇進が決議された。理事会の結果を聞いて「なんかじわじわと喜びがこみ上げてくるよお！」と終始感慨に浸る磯ノ海親方だった。

大神楽は143回に大関に昇進して大いに期待されたが、親方の指導が逆効果となって大関在位5場所での148回に閉脇に陥落、その後、平幕に落ちるなど辛酸を舐めたが、先場所、閉脇に返り咲いて7勝をあげ、今場所はかつての強い大神楽が復活して9場所振り大関への返り咲くことになった。

今場所は横綱若ノ嶋、大関佐賀ノ海の途中休場があったが、美空、千代鈴、大神楽、出羽翼ら力士による優勝争いとなり、大いに盛り上がりを見せる場所となった。

大神楽と春ノ翔の優勝決戦で盛り上がる千秋楽だったが、その一方で、元閉脇源氏丸(桐壺部屋)と元小結磯昇(磯ノ海部屋)の引退が発表された。

来場所は大関が佐賀ノ海と大神楽が入れ替わることになるが、今場所同様3横綱2大関の番付となる。この5人を中心とした優勝争いをぜひとも期待したいものだ。

また、佐賀ノ海が大関復帰の目安となる8番勝てるかどうか注目だ。次の第156回本場所は5月14日に幕を開ける予定。果たしてどのような相撲が展開されるのか開催が待ち遠しい。



(錦風)

友砂超期待の暫、十両連覇

最後に優勝を手にしたのは、やはり暫だった。十日目に2敗の宇治家が敗れて暫が勝ったが、両者とも譲らず星一つ差のまま千秋楽へ。これで3敗勢の優勝がなくなり暫と宇治家の一騎打ちとなった。



宇治家〇(上手投げ) ●夢ノ花



若雲山●(寄り切り)〇 暫

千秋楽、このまま2敗を守り暫の結果を待ちたい宇治家は若雲山との対戦。十両では過去1回対戦があり宇治家が勝っている。

いつもの低い立ち合いから出足良く前に出た宇治家だったが、若雲山に土俵を回りながら残され最後はうまく体を入れ替えられて寄り切りで敗れてしまった。これにより暫の結果を待たずして暫の2場所連続の優勝が決まった。

優勝となった暫は、最後の取組が緩んだか最後の取組が夢ノ花に敗れたが、先場所の成績を上げた。堂々の成績を上げた。いよいよ来場所は、満を持して幕内の土俵に挑むこととなる。



夢ノ花〇(寄り切り) ● 暫

「暫は来場所幕内でも優勝争いしそうだね」と鹿賀乃戸、錦風の両親方に言われてまんざらでもなさそうな笑みを見せる友砂親方。すでに四股名の変更も協会に伝えてあり、来場所嵐を巻き起こしそうな予感は大である。今から活躍が楽しみである。

東筆頭の六歌仙は八日目までで5敗を喫し幕内復帰が厳しい状況だったが、九日目から白星を並べ辛うじて勝ち越しを果たして、一場所での返り咲きを決めた。

他に昇進が濃厚なのは西神門と勝ノ川。西神門は暫と同じく十両3場所での通過で、春日根部屋からは先場所の西安に続いての幕内力士誕生となり、こちらも十分に活躍が期待されるが、まずは勝ち越して幕内に定着するが大仕事となってくるだろう。

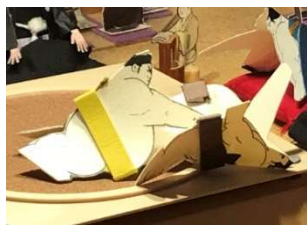
かたや、十両2場所での通過となりそうな勝ノ川は滑り込みで4人目の椅子をゲットしよう。まさに強運の持ち主で、十両昇進を決めた時も若剣の引退で、そして今場所も場所後に磯昇が引退を表明したことに伴い、またも最後の一枚を掴んでの昇進に至りそうだ。早く運を使い過ぎてしまった感はあるが、その後尻すばみにならないように活躍に期待したいところ。

今場所こそは昇進のチャンスかと思われた枚目の葵盛。他の九十九勢が幕内に上がる。葵盛だけはまだ十両から抜け出せていない。十日目、千秋楽と連勝すれば昇進の可能性もあったが、十日目に桜吹雪の得意のど輪攻めで6敗目となり万事休す。来場所に雪辱を期すこととなった。

今場所の十両を盛り上げた立役者の一人と言っているのが宇治家。最後まで暫に独走を許さず優勝争いを演じたのは見事である。千秋楽若雲山に勝ってれば勝ノ川を上回り入幕となっていただけに残念だったが、来場所は暫がいなくなったことで、優勝候補一番手との声も囁かれ、本人もかなりの手応えを掴んだことだろう。十両の土俵にも慣れて一気に実力開花の予感だ。

新、再十両勢では駒波、磯自慢、英風らに星次第では陥落の恐れ性もあり得たが、3人も土壇場で力を発揮し連勝して残留を決めた。磯自慢と英風はともに7勝を上げ親方を安堵させた。陥落となったのは琴乃王と冬牡丹の2人だった。

(勝間田)



角武蔵〇(押し倒し) ●琴乃王

幕下は富士浪・蛮国

幕下は4連勝同士の対戦で蛮国が寄り切りで鹿麒麟を破って初優勝を飾った。今場所こそは、と気合の入る蛮国だが、先場所は磯自慢に敗れ優勝と昇進を拒まれていただけにプレッシャーのかかるところ。